慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	若者にとって, テレビとは何か? : 大学生へのインタビュー調査から
Sub Title	What does TV mean for young people? : investigation by interviewing with university students in Japan
Author	志岐, 裕子(Shiki, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2018
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media and communications research). No.68 (2018. 3) ,p.47- 61
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20180300-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

若者にとって，テレビとは何か？

――大学生へのインタビュー調査から[1]――

志岐裕子

1．問　題

テレビという言葉の本来の意味は，「テレ・ビジョン（遠くのものを見る）」である。そこには即時性・同時性・一斉同報といった放送メディアの技術的特質があった。遠くのものや様子を映像で見ることはテレビ以外にはできないことであり，視聴者もその特性に即してリアルタイム視聴や一方向的な情報の授受をおこなってきた。しかし21世紀の幕開けとともに，インターネット経由での手軽な動画視聴が可能になると，遠くのものを見るという意味での「テレ・ビジョン」の機能はもはやテレビだけのものではなくなった。

「テレ・ビジョン」というテレビ本来の意味が，他のメディアによっていわば相対化された状況のなか，現代の若者の生活においてテレビはどのような機能を果たしているのだろうか。そして，現代の若者はテレビをどのような存在として捉えているのだろうか。本稿は，幼少期・児童期からテレビとインターネットが共存する環境下で生活を営んできた若者世代へのインタビュー調査を通して，上記の問題について検討する。

多メディア環境下で育ってきた現代の若者世代（言い換えれば「インターネット世代」（志岐・村山・藤田，2009））のテレビの見方をみると，テレビの技術的な本質である同時性（＝リアルタイム視聴）や一斉同報（＝番組視聴経験の共有）にはあまりこだわっていないかのように見える（志岐ら，2009; 志岐，2013）。かといって，彼らはテレビを「不要なメディア」と見なしているわけではなく，インターネット上におけるコミュニケーションの材料として活用したり，自分の好みにあったものを選択的に見るという形で大いに活用している一面もある（志岐，2013）。

こうしたテレビ視聴のあり方は，メディアとしての「テレ・ビジョン」の本質とは違ったところで視聴者が「テレビ」というものを受容しているということを意味する。しかし，志岐（2013）の報告では，大学時代に東日本大震災を経験し，遠方で起きた災害の規模や重大さがテレビ映像を見るまでは把握できないということを経験した大学生らが，「テレ・ビジョン」本来としての価値を実感している様子が明らかにされている。すなわち，現代の若者にとってのテレビの本質は，かつての「テレ・ビジョン」と「テレビ」の間を大きく揺れ動いているのではないだろうか。

このような現在のテレビと視聴者の関係を分析するためには，どのような視座が有効なのだろうか。ひとつの例として，村山・志岐・藤田（2010）の研究を挙げておく。この研究では，若者のテレビ視聴に関するエスノグラフィ調査から，若者がどのようにテレビ番

組を記憶し，そこからどのようにテレビの意味づけをおこなっているのかについて検討している。そこでは理論的枠組みとして「自伝的記憶研究」における記憶の機能に着目している。自伝的記憶とは「人が生活のなかで経験したさまざまな出来事に関する記憶の総体（佐藤，2008）」と定義され，その記憶の機能としては，①対人関係の形成，②自己の確認，③自己の方向性などが明らかにされてきたという（Bluck，2003; 村山ら，2010; 佐藤，1998，2007）。このことを踏まえて，村山ら（2010）は，彼らの調査からテレビ番組の自伝的記憶の意味づけについては，大きく2つの傾向が見出されたことを報告している。第1に，現在の自分の進路や興味・関心と結びつける意味でのテレビ番組の記憶，第2に他者とのコミュニケーションを促進する意味でのテレビ番組の記憶である。そして村山らは，前者は自己の確認機能や自己の方向性機能，後者は対人関係の形成機能にそれぞれ対応するものだと指摘している（村山ら，2010）。

これは，テレビの記憶が個人にとってどのような機能をもちうるかという問題について検討した数少ない研究のひとつであるが，この問題はメディア環境が目まぐるしく変化する現代においては，継続して検討していく必要があるのではないだろうか。その際には，テレビが（あるいはテレビ番組が）人々にとってどのような存在としてその生活のなかで位置づけられているのかという問題についてもあわせて注意を払っておくべきだろう。リビングのなかだけでも多くのメディアが共存している現在，幼少期からそのような多メディア環境下で生育してきた若者たちの目に，テレビはどのような存在として映っているのだろうか。

本稿では，2012年に実施した大学生（当時）へのインタビュー調査の結果から，上記の問題について検討する。すなわち，インターネット世代の若者の生活のなかでテレビ（あるいはテレビに関する記憶）がどのように機能してきたのか，そして，若者にとってテレビはどのような存在なのかという問題についての検討である。今回分析するインタビューのデータは，前回（村山ら（2010）で実施されたインタビュー調査）から4年が経過したタイミングで収集したものである。その4年の間に発生した主な社会的出来事としては，FIFAワールドカップ（南アフリカ大会），バンクーバー五輪，テレビの完全デジタル化，東日本大震災などがある。

▶ 2．方　法

2-1．調査の手続き

2012年5月，大学生（当時）に対し2〜3人ずつの半構造化面接を実施した。インタビューに要した時間は1グループにつき約2〜3時間であった。提示資料として，①過去1週間の新聞テレビ欄，②テレビガイド誌（2012年4月分，5月分），③『ザ・テレビ欄Ⅱ　1991-2005（テレビ欄研究会）』，および同書に掲載された各年の事件，世相，流行品，流行歌がまとめられたページを抜粋したコピー，④『テレビドラマベスト・テン10年史1997-2006（進藤良彦ほか編）』，⑤テレビ視聴率ランキングに関する資料（株式会社ビデオ・リサーチのホームページより）を準備した。

2-2．調査対象者

A県に在住する20〜22歳（当時）の大学生女子10名が調査に参加した。いずれも1990年〜92年生まれである。この年代は，幼少期にインターネットが普及し，インターネットとテレビがすでに共存している時代に児童期以降を過ごした世代である。携帯電話は概して高校入学時に買い与えられていた。調査対象者のデモグラフィック変数およびメディア環境は**表1**，テレビ利用状況については**表2**のとおりである。

●表１　調査対象者のデモグラフィック変数とメディア環境

ID	年齢（当時）	居住形態	テレビ所有台数	自分専用テレビ	レコーダー	新聞	パソコン	携帯電話	ネット接続
A	20	家族と同居	3	○	○	○	○	○	○*
B	20	祖父母と同居	2	×	○	○	○	○	○
C	20	家族と同居	2	×	○	○	○	○	○
D	21	家族と同居	2	×	○	○	○	○	○
E	20	家族と同居	3	○	○	○	○	○	○
F	21	ひとり暮らし	1	○	○	×	○	○	○
G	22	家族と同居	6	○	○	○	○	○	○
H	21	妹と同居	1	×	○	×	○	○	○
I	21	家族と同居	1	×	○	○	○	○	○
J	21	家族と同居	1	×	○	×	○	○	○

注１：○は所有，×は非所有を示す。
注２：*は携帯電話による接続のみであることを示す。

●表２　調査対象者のテレビ利用状況

ID	テレビ利用状況	好きなテレビジャンル
A	テレビ視聴は夜にリアルタイムの放送を８時間程度。	バラエティ
B	テレビ視聴は休日は７時間，アルバイトの日は３～４時間。主にDVDやハードディスクに録画した番組を見る。	バラエティ
C	テレビは自宅にいる間は常時電源がついている状態。集中視聴は３時間程度。	ドラマ
D	テレビの電源がついているのは４～５時間。集中視聴はドラマがあるときは２時間，ないときは１時間程度。録画を見る方が多い。	ドラマ
E	テレビの電源は常時ついている。集中視聴は２～３時間。録画を見る方が多い。	ドラマ，バラエティ
F	テレビの電源は常時ついている。就寝時もつけたままであることが多い。集中して視聴するのは３時間程度。	海外ドラマ
G	テレビ視聴時間は３時間程度。番組を視聴するときしかテレビの電源はつけない。	ドラマ
H	テレビは自宅にいる間はずっとつけっぱなしなので，在宅時間＝テレビがついている時間。約７時間。	スポーツ（野球，バレー等），アニメ，ドラマ
I	テレビ視聴時間は平日１時間，休日６時間程度。	特になし
J	テレビ視聴時間は３時間くらい。朝，何かしながら見ることが多い。	ドキュメンタリー，ドラマ

Figure & Table

2-3．主な質問項目

本調査では，主な質問内容として以下の14項目を設定した。このうち，本稿では主に調査対象者たちの⑽および⑿～⒁への回答をもとに，前述した問題について検討をおこなう[(2)]。

(1)　１日あたりのテレビ視聴量
(2)　最近印象に残ったテレビ番組について
(3)　視聴番組の選択基準について
(4)　テレビに関する会話について
(5)　単独視聴と共視聴について
(6)　テレビとインターネットの同時並行利用について

(7) ニュースの情報源について
(8) パソコン等での動画サイトの閲覧について
(9) モバイル機器での映像視聴について
(10) 幼少期から今までで印象に残っている番組と番組にかかわる記憶について
(11) 大学入学前と入学後のテレビの見方
(12) これまででナンバーワンのテレビ番組は？
(13) 「テレビがなくなる」と言われたらどう感じるか
(14) あなたにとって，テレビとは？

3．結　果

3-1．印象に残っている番組と番組にかかわる記憶

この項目では，幼少期から現在に至るまでの期間で，印象に残っている番組とそれにかかわる記憶について尋ねた。回答から得られたひとつの傾向としては，大学生たちは過去に視聴したドラマを通じて，さまざまな職業についての知識を得ていたということがある。なかには，その経験が自らの進路に影響したと話す者も存在した。

（ドラマ『LADY～最後の犯罪プロファイル～』（2011 年，TBS）およびドラマ『ATARU』（2012 年，TBS）について）
D さん：心理（学科）に入ってから『LADY』ってドラマ見て，そういう仕事あるんだって思って。
調査者：プロファイルとか？
D さん：かっこいいなと思いました。……（授業で）習ってるのが出てきたら嬉しくない？
C さん・E さん：うん。
D さん：『ATARU』も半側空間無視が出てきて「あっ，習った」と思った。
E さん：「知ってる！」って思って。……でも，知識は増えます。
C さん：増えるね。
調査者：知識ってどんな？
E さん：なんて言えばいいか分かんないですけど，知らなかった仕事の内容とか。
調査者：職種とか？
E さん：はい。「こういう仕事があるんだ」とか。

（ドラマ『R-17』（2001 年，テレビ朝日）について）
I さん：『R-17』っていうドラマがあったんですけど，それはなんかカウンセラーみたいなやつで，そこからちょっと心理に興味持ちました。……そういう仕事があるっていうのをそのドラマで知ったんで，ちょっとは（自分の進路に影響が）あるのかなと思います。

（ドラマ『MR.BRAIN』（2009 年，TBS）について）
A さん：それですごい脳に興味持って。めっちゃ興味持って。だから 1 回，大学で心理のやつで，もうすごい脳のこと勉強したいってそれで思った。……面白いってなって。心理学，えーっ，こんな面白いんだって。脳でなんかこう示して，とか。めっちゃハマった。ずっと見てた。

このように，ドラマを通じて特定の職業があることやその内容を知り，憧れや興味を抱いたり，進路決定の際の参考とするケースがみられた。また，テレビ番組を通して形成される職業イメージは概してポジティブなものが多かったが，その一方で全く逆のイメージを形成するケースも存在していた。ドラマ『ナースのお仕事』（1996 年，フジテレビ）を見た者のなかには，ドラマを見て看護師の仕事の過酷さを知り，「その道には進みたくないと思った」という者が存在していた。

近年の若者世代は，友人や知人とはあまりテレビの話をしないことが指摘されている。それは，今回の調査対象者も例外ではなかった。（この点についての詳細な分析は志岐（2013）を参照されたい）。その理由のひとつとしては，大学入学後，それぞれの生活スタイルが分散化したことが大きく影響している。つまり，アルバイトの就業時間などの影響で同じ時間に共通の行動をとることが少なくなり，結果として友人たちと視聴番組が一致しなくなる。そうなると，テレビ番組がお互いの共通項として機能しなくなり，テレビの話題が友人同士の会話にのぼらなくなるのである（志岐，2013）。その代わり，テレビの話題はネット上の仲間と共有することが増えてくる。今回の調査でも，大学生たちが関心が共通している者同士でインターネット上に集まりテレビの話題を共有するという形でのコミュニケーションをとっていることが確認された（志岐，2013）。また，橋元・奥・長尾・庄野（2010）は，テレビを見ながらパソコンやケータイを触る「ダブルウィンドー」といわれるテレビ視聴スタイルが普及し，人々は放送を見ながら友人や見ず知らずの第3者とネット経由で番組内容についての話をしているため，その時点ですでにテレビについての話が終わっているのだと指摘している。

確かに，テレビについての話題が友人との会話にのぼる機会は，メディア環境が進化し，生活スタイルが分散化するとともに減少しつつある。皆が同じ番組を視聴しており，テレビ番組の話が天気の話と並んで無難なコミュニケーションの話題として用いられたかつてとは異なり，現代では，他者と積極的に直接テレビの話をしない者のほうが多数派のようだ。しかし，今回の調査で詳しく話を聞くと，非常に限定的な範囲ではあるが，テレビの話題が他者とのコミュニケーションに役立ったと答えた者も存在した。例えばコンビニエンスストアでアルバイトをしているAさんは，同じ店で働く50代の女性とテレビの話をするという。

Aさん：50（代）後半ぐらいのおばちゃんと，韓国のドラマの話する。「あれ見ました？」って。
調査者：何で（その話を）するの？その人と。
Aさん：私が（おばちゃんとは）違う人に「『ドリームハイ』（2011年，KBS）って今やってて，それ私好きなんですよね」って言ったら，「あのおばちゃんも好きだよ」みたいに言ってたから，じゃあ，（おばちゃんに）話してみようと思って。「『ドリームハイ』見てるんですか」って言ったら，「うん，見てるよ」って言ってたから。他のそのときやってた昼ドラの韓国のやつとかも見てるって言ってたから，その話をして。「見ました？この前やってましたね」とか。

Aさんは当時アルバイトを始めてまだ月日が浅く，この50代の女性のことも「怖かったもん，最初は」と語るほど苦手だったが，現在は韓国ドラマという共通の話題をきっかけに打ち解けることができ，「おばちゃん好きだもん，一番」と語るほど良好な人間関係を築いていた。Aさんはこのことを振り返り，今はアルバイトに慣れてきたということもあるが，そこでの人間関係の構築にテレビの話題は役に立ったと思う，と語った。

Aさんと異なるグループでインタビューを受けたJさんも，アルバイト先の人とのコミュニケーションにテレビが役に立ったと述べている。

Jさん：『（新世紀）エヴァンゲリオン』（1995～96年，テレビ東京）の話で盛り上がったりはした。バイト先の人と。
調査者：なぜその話を（したのか）？
Jさん：たぶんなにか関連グッズを（相手が）持ってて，ちっちゃい。で，「好きなんですか」みたいな。「好きだよ」みたいな感じになって，「あそこよかったですよね」みたいな。
調査者：それで今までより仲良くなれたということはある？
Jさん：あります。フィギュアとか貰ったり，「こんなんありましたよ」とか。

A さんと J さんに共通しているのは，自分と同じ番組を相手も視聴している，または好きであるという手がかりを事前に持ったうえで，会話の話題としてテレビ番組をあげているということである。大学生たちは，自分が好きな番組を相手も見ていると知ったときはそのことについて話すこともあるが，逆に，相手が見ていない，見ているという前提がないときは，ほとんど話題にはあげないと語った。例えば「これいい，面白かったよねって。見てるだろうなって思う人にしか言わない。この人あんま見てないだろうなって思う人には……（言わない）」（A さん），「ちょっと情報があれば話します。アニメが好きな人だったら，見てますかという話をします」（E さん）といった発言である。このことを踏まえると，以下のことがいえるだろう。すなわち，一昔前のように，多くの人が共通して視聴している番組が存在していて，誰もがそのことについて話ができる，いわゆる「無難な話題」としてテレビがコミュニケーションに寄与することは，現代ではほとんどなくなってきている。しかし，あまり親しくない相手が自分と同一の番組を視聴している（あるいは好んでいる）という手がかりが与えられたとき，その番組の話題はその相手との関係性の進展に大いに寄与しうるということである。D さんもやはりバイト先の先輩とアニメの話をすると語っていたが，もしその先輩があまりテレビを見ない人だったら「今より絶対そんなに親しくないと思う」と述べた。きっかけは D さんが読みたいと思っていた漫画を先輩が好きだと言っていたのを聞き，漫画を貸してもらったことであったが，ちょうどその漫画をアニメ化したテレビ番組が放送開始されるタイミングであったため，一緒にアニメを見て，会うたびにその番組について話をするようになった。アニメの話題を通じて親しくなった今では，お互いに見ているアニメを勧めたり，その先輩との話題づくりのためにアニメを視聴することもあるという。個々が好んで視聴する番組が分散化している現代だからこそ，テレビがお互いの共通項となりコミュニケーションを促進させるときには，その効果はより高いものになる可能性も含んでいるようである。

3-2.「ナンバーワン」のテレビ番組

この項目では，これまでに視聴したテレビ番組のなかで，おのおのにとって「ナンバーワン」といえる番組は何か尋ねた。この質問は，「ナンバーワン」という言葉の解釈も含め特定の番組を想起してもらい，その番組が本人にとってどのように機能してきたのかを，番組視聴の記憶を通じて探ることが狙いである。さらに，その番組をナンバーワンに選んだ理由もあわせて尋ねた。結果の概要は**表 3** のとおりである。

今回の調査では，「ナンバーワン」として，毎回楽しみにしていた番組，何度も繰り返し視聴した番組，自身にとって影響が大きかった番組などがあげられた。それぞれの番組を選択した理由から，ナンバーワン番組には概ね 5 つの特性が見出された。すなわち，①新規性，②没入，③親和性，④好み，⑤影響である。

第 1 の特性の「新規性」とは，テレビ番組を通じて自分の知らない世界を垣間見ることができたというケースである。あまり知る機会がない著名人のルーツを知ることができるという理由で『情熱大陸』（1998 年～，TBS）を挙げる者や，前述したようにドラマを通じて未知の職業やその世界を知ることができたという者も存在していた。中学生の頃に視聴したドラマ『オレンジデイズ』（2004 年，TBS）を選んだ I さんは，「私の青春って感じです。……大学ってこんな感じなんだって」と，ドラマで描写された大学生活に憧れを抱いた当時を振り返った。同グループでインタビューを受けていた他のメンバーたちも「憧れがあった」（H さん），「自分のちょっと上（の年代の話）っていいよね。……なんか想像できるかなっていう」（J さん）と賛同した。ドラマ『MR.BRAIN』を挙げた C さんは，脳科学という未知の世界をドラマを通じて垣間見，大きな衝撃を受けたと語った。登場人物の名前や主題歌といった情報はほとんど忘れている一方で，脳科学という世界を

●表３　調査対象者の「ナンバーワン」のテレビ番組

ID	番組名	理由
A	プロポーズ大作戦	出演者がみんな好きだった。見ると嬉しい気持ちになる。
B	ダウンタウンのガキの使いやあらへんで！	ずっと見ていたし，ずっとそばにあるから。一番親しみがある。
C	MR.BRAIN	「すごい！」という驚きがあった。「こんなことで人の気持ちがわかるの?!」という衝撃しか覚えてないけれど……。
D	オレンジデイズ	主演俳優，内容，主題歌，すべてが良かった。
E	決められない	ありすぎてわからない。
F	デスパレートな妻たち 警察24時	ストーリーの展開が魅力。初めてこんなに（連続ドラマを）見続けた。
G	木更津キャッツアイ	岡田君（岡田准一）が好きだから。内容も面白かった。若者の話だったから身近だった。
H	キッズ・ウォー	夏休みに夢中で見ていた。毎回楽しみにしていた。
I	オレンジデイズ	大学生活に憧れた。
J	情熱大陸	著名人のルーツなどがわかり面白い。

知った衝撃だけが鮮明に記憶されていた。

（ドラマ『MR.BRAIN』について）
C さん：主題歌を覚えてるわけでもないし。なんか，「めっちゃすげー」みたいなことしか覚えてない。そのときの気持ちぐらいしか覚えてない感じ。「こんなことできるの？」みたいな。「こんなことで分かる？」，「人の気持ちが分かるんだ」みたいな，そんな衝撃ぐらいしか覚えてないから，ドラマの内容を全部覚えてないし，登場人物，それこそキムタク（木村拓哉・主人公）の役の名前とかも全然覚えてない。

このように，C さんはこのドラマについて，番組の柱となるテーマとそのテーマにかかわる知識を得たときの衝撃しか覚えていないが，それでもナンバーワンに選ぶほど自分のなかで大きな存在感をもつテレビ番組として記憶していたのである。

第２の特性の「没入」は，ある一定の時期に繰り返し視聴したり，番組に対していわゆる「ハマった」状態になったことが強く記憶されているケースである。例えば，小学生の頃に放送されたドラマ『キッズ・ウォー』（1999～2003 年，TBS）を毎回楽しみにしていたという H さんは，主人公が同世代で，性格がさばさばしているところに好感を持ち，夏休み中に毎日視聴していたという。「（『キッズ・ウォー』を）見ないといけないからって言って，そこ基準で時間のスケジュール（を調整していた）」と，幼少期の記憶とあわせて番組を熱心に見ていたことを語った。『木更津キャッツアイ』（2002 年，TBS）をナンバーワン番組に選んだ G さんは，放送をダビングし，何度も繰り返し視聴したという。「1 話目から最終話まで全部自分で録画して，ビデオのここに貼るやつ（※筆者注：ラベルのこと），あれもめっちゃ綺麗に書いて。……それを毎週毎週やってて。……番組終わってからも人気のホームページって残ってたりしますよね。それとかもめっちゃ見てた」と語り，今もそのドラマの映画版を視聴するほど大好きだったという。やはり G さんも H さんと同様に，番組の内容だけでなく，当時自分がどのようにその番組とかかわっていたのかという記憶とあわせて番組について語っていた。

特に番組を通じて目新しい知識を得たり，番組に深く没入したわけではないが，長期間にわたってずっと見続けている番組をナンバーワン番組として挙げるケースもあった。こ

れが第3の特性「親和性」である。Bさんは『ダウンタウンのガキの使いやあらへんで！』（1991年～，日本テレビ）を長年見続けており，「ずっと見てたし，ずっとそばにあるから。……影響を受けてはないけど，なんか一番親しい」と，番組との関係性を「親しい」という言葉で表現した。Fさんは警察の活動を取材したドキュメンタリー番組（いわゆる『警察24時』と呼ばれる番組）を長年家族で見続けていると語った。ひとり暮らしになった現在も，番組が放送されるときは必ず母親から連絡がくるため視聴するようにしているとのことであった。これらの語りからは，同一の番組を長年にわたり習慣的に視聴することによって，番組と個人あるいは家族との関係性を「親和性」として取り結ぶ様子がうかがえた。

ドラマ番組のキャストやストーリー，場面設定などに好感を持ち，ナンバーワンに選んだ者もいた。これが第4の特性「好み」のケースである。挙げられた番組は，『プロポーズ大作戦』や『オレンジデイズ』，『木更津キャッツアイ』といった，どちらかというと若者向けのドラマであった。番組については「見ると嬉しい気持ちになる」（Aさん），「妻夫木（聡）君が好きだったし，話の内容も良かったし，主題歌がミスチルだったし，全部良かったです」（Dさん）といった感想が語られた。Gさんは「内容も面白く，若者の話だったから身近に感じた」と語っていたが，視聴当初は主演俳優が好きという理由で番組を見始めており，「好み」がテレビ番組との関係の入り口として機能していることがうかがえた。

今の自分に何らかの影響を及ぼしたという理由でナンバーワン番組を選んだ者もいた。これが第5の特性「影響」である。例えばBさんは，幼少期に見たアニメ番組が，自分の性格に影響していると考えていた。彼女は最終的にナンバーワンの番組として別のバラエティ番組を選んだが，候補として挙げていたアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』も自分にとって大きな意味をもつ番組だったと語った。

（アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』について）
Bさん：あれは見るものじゃなかったって思ってますけど。
調査者：なぜ？
Bさん：だって，暗い。幼少期にあんなものを見るべきじゃないと思う。でも，あれがないと今の自分は……（ない）。いろんな，そういう友達とかも全部含めて。だから，たぶんそこで（エヴァンゲリオンに）出会ってなかったら，Aちゃんみたいになってるかもしれない。ドラマとか青春物が大好きみたいな。
調査者：『エヴァ』を見て何が変わったと思う？
Bさん：アニメとかそういうものに対してもうなんか寛容になってるっていうか。……一時期そっから生意気な子供でした。なんかちょっとひねくれましたよね，あれ見て。素直に『アンパンマン』とかだけ見てれば良かったんだけど。

Bさんの語った番組の記憶は，楽しい思い出などではなく，番組から受けた影響が良いものだったとも考えていないようであった。しかし，そのアニメを視聴した経験が現在の自分の性格や友人関係をはじめとしたあらゆる側面の土台となっていると感じており，Bさんにとっては特別で重要な意味をもつ番組になっているようだった。その他，脳科学の世界を描いたドラマに衝撃を受け，その後大学で心理学を専攻することに決めたというCさんのケースも，この「影響」のタイプに該当するといえるだろう。

以上の大学生たちの発言からわかるように，これら5つの特性は排他的なものではなく，重なり合う部分も多くみられる。単発的に「楽しい」「面白い」と評価される番組は数多く存在するが，ある程度の長い期間を経て若者たちの記憶に残り，高く評価される番組には上記のような特性が備わっているということが明らかになった。

番組のジャンル別にみるとドラマ番組が多く挙げられているが，これは調査対象者が全

員女性であることに起因している可能性が高い[(3)]。加えて，現在視聴している番組を「ナンバーワン」として挙げた者は3名に留まり，その他全員が過去の番組を挙げていた。そして，それぞれの番組の記憶は，多くの場合，視聴していた当時の自分の生活や，そのとき抱いた感情とあわせて記憶されていた。

3-3．もしテレビがなくなったらどう感じるか

この項目では，調査対象者にもしテレビがなくなったらどう感じるかを尋ねた。「テレビ離れ」という言葉が聞かれるようになって久しく，その存続を危ぶむ声やテレビは「オワコン（終わったコンテンツ）」であると揶揄する声も聞かれる（佐々木，2017）。もし，本当にテレビがなくなるとしたら，彼女たちはどう感じるのだろうか。テレビの欠如した状態を想像してもらうことで，逆説的にテレビの意義や重要度を語ってもらうものである。

調査対象者の回答は，大きく3つの方向に分かれた。すなわち，テレビがなくなることをマイナスに感じる者とプラスに感じる者，そして何も感じない（自分に影響があるとは考えない）者である。

まず，テレビがなくなることをマイナスだと捉えた調査対象者たちは，その気持ちを「寂しい」「困る」といった言葉で表現した。例えば「生きていけるけどめっちゃ寂しい」（Bさん），「寂しい。やることなくなります」（Eさん），「なくなったら困る，嫌だなって思う。……娯楽がすごい減るかなって」（Hさん）といった発言である。彼女たちは親しみの対象や娯楽としてのテレビを失うことに対して強い抵抗感を示した。また，テレビの「音」がなくなることに不安を示す者も存在した。

Eさん：なんか「ながら」が多いんで，やっぱ片付けしながらテレビついてるとか。
Cさん：テレビはずっとついてるから，（なくなったら）たぶん静かになるかも。
調査者：生活が？
Cさん：うん。あと，たぶん家族の会話が減ると思います。
Eさん：確かに。
調査者：それぐらい，家族で話す内容ってテレビの話題が結構ある？
Cさん：なんか話しなくても，テレビが鳴ってるから静かじゃないみたいな感じするし，たぶんテレビついてなかったら，パソコンに没頭するんで。
調査者：そうか，ひとりの世界みたいになってしまう？
Cさん：うん。

このように，ながら視聴のときや，家族団欒の場など，自分たちの生活の背景に流れている「音」としてのテレビを失うことに，EさんやCさんは抵抗感を示した。さらに，上記のCさんの発言からは，家族同士が直接会話をしていないときであっても，テレビの「音」によって家族団欒の場が維持され，「ともに過ごしている」感覚を持ち得ていることがうかがえる。また，テレビがなくなると「困る」と答えた者のうち，JさんとHさんは以下のように語った。

（「なぜテレビがなくなると困るのか？」という質問に対して）
Jさん：自分から（情報を）取りに行かなくちゃいけないのがすごい面倒くさい。
Hさん：そうだね。分かる。
Jさん：テレビって自動的になんか……
Hさん：情報くれるからさ。
Jさん：自分で（情報を）探して，どこにあるのかを探して取りに行って，管理するって作業もめっちゃ面倒くさい。

ここでJさんとHさんが語ったのは，重要な情報をピックアップして一方的に内容を放送するというマスコミュニケーションメディアとしてのテレビの重要性だった。インターネットの利点として，自分が見たいものを検索して見たい情報だけを入手できるという，いわゆるオンデマンドの性格を有しているという点があるが，彼女たちは，全てのメディアがそうなってしまうと情報を取りに行くのが非常に面倒で，ある程度は一方的に情報を流してくれる装置が必要だと語った。

一方で，テレビがなくなることをプラスの方向に捉える調査対象者もわずかではあるが存在した。Iさんは現在のテレビ視聴時間も決して少ないほうではないが，テレビがなくなるとどう思うかと尋ねたところ，それを前向きにとらえる様子を示した。

Iさん：ちょっと自由になるかなってのもありますね。テレビに，こう来るものがなくなった分，自分で探しに行ける。他に何か楽しいことを探せるかもしれないっていう。
調査者：今は結構，テレビの内容に縛られてる感じがする？
Iさん：はい。だいぶ洗脳されてるなっていう。バラエティの喋り方とか，考え方が結構。

Iさんは情報の流れに関して，先に挙げたJさんやHさんとは逆の捉え方をしている。Iさんは，テレビからさまざまな情報が一方的に自分のなかに流れ込み，それに自分がかなりの影響を受けていることを自覚している。そのことを窮屈にも感じ，もしテレビがなくなるのであれば，そのような状態から解放されるかもしれないと期待しているのである。

テレビがなくなっても自分の生活への影響は全くないだろうと考える者も存在した。彼女たちは，「テレビに対してそれほど執着していない」と自己分析していた。Gさんは，昔はテレビに熱心だったが，今はそれほどでもないので，もしテレビがなくなっても大丈夫だと語った。Fさんは「私，一時期テレビないときあったもん，アパート。……全然関係なかったよ。DVDは見てたけどね」と，ひとり暮らしを始めた頃にテレビがない生活を経験したことを振り返り，再びその頃の生活に戻るだけなので平気だということであった。さらにFさんは，テレビだけでなく様々なもの（例えば携帯電話）に執着しなくなってきていると語った。GさんやFさんのこのテレビに全く執着しない傾向は，もともとそうだったというわけではなく，高校，大学と歳を重ねるごとに，ひとり暮らしやテレビ以外の娯楽を経験したり，生活スタイルが以前と変わり，テレビが対人コミュニケーションのなかで占める割合も低下していくなかで，徐々にデバイスの所有に執着しないようになっていったようだった。

Fさん：中学校のときに（この質問を）聞かれてたら，ちょっとは（答えが）変わってたかもしれない。……「面白くなくなるじゃん」みたいな感じに言ってたと思う。だって，テレビで楽しんでたもんね。
Gさん：楽しんでた。

テレビへの思い，あるいはテレビとの関係性の重要度は分散化している。情報源や娯楽，そして「音」を失うことへの強い抵抗感を示した者が存在する一方で，テレビの影響から解放されることへの期待を抱いたり，テレビがなくなっても自身の生活に全く影響がないと考える者もいた。テレビに執着しない者に関しては，過去にテレビがない生活を実際に経験していたり，現在は過去ほどテレビで楽しんでいないという背景があった。

3-4．あなたにとって，テレビとは？

現代の若者にとって，テレビはどのような存在なのだろうか。この項目では，調査対象者に「私にとって，テレビとは○○である」の○○の部分にできるだけ短い言葉を当てはめてもらい，その理由を尋ねた。結果は**表4**のとおりである。

調査対象者は，その回答の傾向から概して２つのタイプに分けられた。第１に，テレビが存在することに目的を必要としない人々である。すなわち，「○○のためにテレビが必要」といったような理由づけをせずに，テレビを絶対的に必要な存在として捉える人々である。具体的には，テレビは「空気」「家族」「必需品」であるといった回答が挙がった。

Ｂさん：空気。意識しないけど，なきゃ駄目。なくなるともう無理。

Ａさん：お友達。テレビだけが友達じゃないですよ。そんなに寂しい人じゃないけど，ずっと一緒にいるから友達。あっ，家族かな，いや，分かんない。家族かも。（家にいる時間）ずっと一緒にいるから家族だ。

「必需品」と答えたＤさんは「やっぱり（テレビが）ないと寂しい」と答えた。同じグループのメンバーも同意し「友達ほど大事じゃないけど，あったほうがいい」（Ｃさん）と付け加えた。このような発言から，このタイプの人々はテレビを家族や友達といわば並列して位置づけていることがわかる。つまり，単なる電化製品というよりも，親しみの対象としてテレビの存在を捉えているということだ。

第２のタイプは，第１のタイプとは対照的に，テレビの存在に何らかの目的を付随させる人々である。言い換えれば，テレビを何らかの目的を達成するための「ツール」として位置づける人々である。その目的は「暇つぶし」や「趣味」，「社会」を知ることや「情報」を得ることである。Ｉさんは，テレビを通じて「人の動きが見える」という理由から，テレビは自分にとって「社会」であると表現した。Ｈさんや Ｊさんも，Ｉさんと同様，テレビは社会を知るための情報源としての役割が大きいと語った。

（テレビは「情報源」だと回答した理由）
Ｊさん： 他のメディア，なんかいろんなメディアがあるけど，そのひとつの主要なもの。
調査者：その主要なもの？雑誌，新聞，ラジオとかいろいろあるけれど……。
Ｊさん： ネット，テレビみたいな。
調査者：ネットが先？
Ｊさん： いや，並んでます。

（テレビは「世界とひとつになるための媒体」だと回答した理由）
Ｈさん：今，社会がどういうものに関心を持って，どういうことが起きているのかっていうことをテレビを見ることで知ることができて，みんなと共有できるからです。

●表４　「あなたにとって，テレビとは？」に対する回答

ID	テレビとは？
A	空気
B	家族
C	暇つぶし
D	必需品
E	趣味
F	家電
G	家電
H	世界とひとつになるための媒体
I	社会
J	情報源

調査者：Twitter もそうじゃないの？ Twitter とどこが違うかな。
H さん：Twitter はやっぱ偏りがある。フォローしてる人しか見てないし。
調査者：テレビの方が？
H さん：が，総合的に見れる。

このように，J さんや H さんは他のメディアと比較して，テレビの情報源としての有用性を感じ取っていた。J さんは，さまざまなメディアが存在するなかで，テレビとネットが自分にとって最も重要なメディアであり，その重要度は同じくらいであると語っていた。H さんは，この質問の前に頻繁に Twitter からニュースを取り込んでいることを語っていたのであるが[(4)]，社会的出来事や社会的関心を知るためには Twitter よりもテレビのほうが「総合的に見られる」という点で有用性が高いと判断していた。つまり，自分の関心事とは関係なく，社会一般的に重要な出来事や高い関心が寄せられている事柄を知るためのツールとして，テレビを評価していた。

ただし，この第２のタイプに含まれる人々のなかでも，自分にとってテレビがどれくらい重要であるかという評価には，かなりのばらつきがあった。例えば，テレビは「家電」だと答えた F さんや G さんは，テレビをある種のツールとして捉えている点はその他の第２のタイプの人々と同様ではあるが，詳しく話を聞いてみると，テレビに対するよりクールな態度が見て取れた。例えば F さんは「テレビは家電。他の家電（掃除機や炊飯器）と一緒。テレビか炊飯器かと言われたら炊飯器を選ぶ」と語った。このようにテレビの重要度がそれほど高くない F さんと G さんは，先の質問で「テレビに執着はない」と回答した２人である。F さんと同様に「テレビは他の家電と一緒」と語った G さんは，高校生まではテレビに夢中だったという。「昔は結構テレビは絶対いると思ってて，（自分の）部屋には絶対いるし，私の生活にはテレビが必要みたいな感じだったけど，今はなくなっても別に困らないかな」と語り，テレビを必要とする思いの強さが当時と比較してかなり薄れてしまったことをうかがわせた。その理由について G さんは次のように語っている。

（テレビが必要だという気持ちが薄れた理由について）
G さん：（テレビを）あんまり見ない。自分のパソコンが大学になったらあるから，買ったから，そっちで何かをしたりとかしてる。高校のときはケータイとテレビしかなかったから，もう別にケータイもすることないし，だからテレビ見ようって。それしか選択肢がなかったからテレビ見てたけど，パソコンとか自分でどっか行ったりとかが増えたから，もうテレビ見なくなった。

G さんのこの語りからは，年齢や生活スタイル，所持しているメディアは何か，興味関心は何かという条件によって，テレビがどの程度重要なメディアとして位置づけられるかが一個人のなかでも大きく変化しうることがわかる。

▶ 4．考　察

ここでは，上記のインタビュー結果を踏まえて，先に設定した２つの問題について検討していきたい。すなわち「若者の生活のなかでテレビはどのように機能してきたのか」，そして「若者にとってテレビはどのような存在なのか」という問題である。

4-1．若者の生活のなかでテレビはどのように機能してきたのか

まず，テレビは若者の対人コミュニケーションを促進させる機能をもっていた。近年，

テレビの話題はTwitterをはじめとしたインターネットのプラットフォーム上で共有されることが多くなってきており，リアルな友人との間にテレビの話題はのぼってこなくなってきている。今回の調査対象者たちにも確かにそのような傾向は確認された（志岐，2013）。しかし，友人とはテレビの話はしないが「アルバイト先の人」とはテレビの話をよくする，という若者が複数確認され，そのいずれもがテレビの話題のおかげで相手とより親密になれたと語っていたのである。

友人とはテレビの話をしないのに，なぜアルバイト先の人と話すのだろうか。理由として考えられるのは，アルバイト先の同僚は大学の友人に比べて共通項が少ないということである。今回の調査対象者たちは，大学の友人とは視聴する番組がバラバラなのであまりテレビの話はしないと語った（志岐，2013）。テレビの話をするよりは，皆が共通している授業や就職活動の話を話題として選択するのである。しかし，アルバイト先の人とは，おそらく授業や就職活動といった日常生活での出来事が共通項とはならず，恋愛話や個人的な悩みの話をするほど親しくもない。そういったとき，テレビが相手との共通項として存在するのならば，非常に便利な，かつ無難な話題として機能するということである。しかし多くの場合，相手もその番組やジャンルを好きであるという手がかりが事前にあるときのみテレビの話題を持ちかけるということであった[(5)]。家庭内においては，家族間で会話がないときであってもテレビの音でその「場」が維持され，コミュニケーションの場に家族成員を引き留める機能をテレビが果たしているケースが確認された。

また，テレビは「今の自分を形成するもの」としても機能していた。調査対象者たちは，自分の性格やものの考え方，喋り方，進路決定といった側面で，自分がテレビから大きな影響を受けていることを自覚していた。そのことについて学生たちのなかには，「すごい勉強したいって思った」といったようにテレビ番組が前向きな方向に背中を押してくれたと感じ，自らの視野を広げ，進路や職業選択の指針として機能したという者がいた。一方で，「あんなもの見るべきではなかった」，「だいぶ洗脳されている」というネガティブな思いを持ちつつ，その影響を強く受け止めている者もいた。

今回のインタビューで見出された「対人コミュニケーションの促進」，「自己の形成」といったテレビの機能は，村山ら（2010）が援用した自伝的記憶の機能，すなわち①対人関係の形成，②自己の確認，③自己の方向性と対応しているといえよう。前者は対人関係の形成機能と，後者は自己の確認および自己の方向性の機能と対応しており，村山ら（2010）の研究で見出されたものと同様の機能が，今回の調査対象者のインタビューからも確認できた。

4-2．若者にとってテレビはどのような存在なのか

若者にとってテレビのもつ意味合いは一義的なものではなく，多様化している。まず，テレビに何らか目的をもたせている者とそうでない者が存在していた。前者は情報取得や社会とのつながり，暇つぶし，趣味など，あくまでもそれぞれの目的を達成するための「ツール」としてテレビの存在を捉えていた。しかし，個々人の生活においてテレビがどの程度重要なポジションに位置しているかという点についてはばらつきがあり，かなり重要度の高い生活ツールとして位置づける人もいれば，優先順位の低いところに位置づける人もいた。後者の（テレビの存在に目的を必要としない）人々は，何か明確な目的をテレビに求めているわけではなかった。テレビの存在を家族や友人の存在に例え，テレビがなくなれば「寂しい」と感じる。彼女たちにとって，テレビは親しみの対象であり，もはや電化製品や生活ツールではなく「人」としての性格を帯びているようであった。そのような感覚は一部のテレビをツールとして扱う人々の間でも共有されていた。テレビは「ながら」作業のおともであり，家族といる空間に漂う沈黙を「音」で埋めてくれる。テレビは

普段は意識しないがなくなると死んでしまう「空気」であり，「音」であり，「人の気配」をもつ存在であった[(6)]。

大人になってからテレビに出会った高齢者の世代の人々（1942年以前に出生した人々）にとって，テレビは豊かさの象徴であり，高嶺の花であり，やがて人並みの暮らしの記号となったという（大坪，2013）。かつて，テレビは「遠くのものを見る」という本来の機能を越えて，社会的にも文化的にも特異なシンボルだったのである。そこから時代を経て，テレビと同等の，あるいはそれ以上の機能を持ち合わせた情報メディアが次々と登場し，テレビはone of themの情報メディアになった。そのone of themであるテレビは，人々の生活にますます一体化し，その位置づけは今，分化しつつある。全ての人にとって一義的に「主要なメディア」として位置づけられる存在ではなくなりつつあり，ある人にとっては生活と不可分であるし，ある人にとっては重要な生活ツール，またある人にとっては単なる家電のひとつである。とくに多メディア環境下で生育してきたインターネット世代の人々とテレビとの関係性は多様化の一途をたどっているといえる。

テレビは「テレ・ビジョン」という本来の意味を越えて，社会的・文化的なコンテクストを含めた総括的なシンボルとなってきたが，それゆえに，テレビとの関係が意識化されにくく，視聴者が具体的にどのように自分とテレビとの関係を捉えているのかを分析することが難しかった。多メディア化した現在，テレビと人との関係性が多様化しているという結果からは，「テレビ」の意味の変容だけでなく，これからのテレビの可能性についても検討する萌芽を見出すことができるのではないだろうか。

●注

1．本研究は，慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所の共同研究プロジェクト「記憶の共有と風化―テレビの社会的役割の変化」（2008～12年，代表者：萩原滋教授）の一環として行われた調査のデータを再分析したものである。
2．その他の質問項目に対する回答の結果については，志岐（2013）の論文にて報告しているため，そちらを参照されたい。
3．村山ら（2010）のインタビュー調査では，現在のテレビ番組の記憶としては，男性は「スポーツ」「お笑い」女性は「ドラマ」が特徴的に示されたという。
4．SNSでニュースを取得することについて，小川（2011）は，新聞やテレビなど決められたニュースオーダー（順序）ではなく，自分のペースで自分の知りたい情報を入手できるというメリットが存在することを指摘し，そのようなメリットに若者たちが価値を見出していると述べている。Hさんは情報が流れてくる速さを利点と感じ日常的にTwitterでニュースを閲覧していたが，目にするニュースの内容が偏ってしまうというデメリットも同時に感じていたようであった。
5．中学3年生（2010年当時）を対象にインタビュー調査を実施した渋谷（2013）の報告によると，彼らは自分の好きなことをわかってくれる人を選択し，その「わかってくれる人」とのみ，好きな芸能人，好きなアニメやスポーツなどの話題を語っていたという。自分が好きなものを相手も好きだということを事前に把握したうえで話をするという傾向は，多メディア環境下で生育し，興味関心が分散化しやすい世代にとくに共通して見出される特性なのかもしれない。
6．志岐・李・小城・上瀬・萩原・渋谷（2012）が2011年に実施した調査では，「テレビを見ていると，一人でいても寂しくない」という項目に対し，「よくあてはまる」との回答が最も多かったのは10代であり，年齢層が上がるほど「よくあてはまる」への回答率は減少した。また，視聴番組の選択基準に関する質問では，あまり内容にこだわっていないとも解釈できる傾向が一部の若年層に見出されている。志岐ら（2012）はこのことから，特に若年層のなかにはテレビに対して内容の提供というよりも，人の気配やBGMのような音を提供する役割を見出しているのではないかと推測している。

●参考文献

Bluck，S.（2003）Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*，11，113-123.
橋元良明・奥律哉・長尾嘉英・庄野徹（2010）ネオ・デジタルネイティブの誕生―日本独自の進化を遂げるネット世代　ダイヤモンド社．
村山陽・志岐裕子・藤田結子（2010）大学生のテレビ視聴の変化と記憶の「個人化」 メディア・コミュニケーション（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要），60，107-116.

小川浩司（2011）ネット接続時代のテレビ―CES2011と利用者調査から―　放送研究と調査，61（6），34-47.
大坪寛子（2013）現在の高齢者たち―「大人」としてテレビに出会った最後の世代　萩原滋（編）『テレビという記憶　テレビ視聴の社会史』　新曜社　58-76.
佐々木健一（2017）“オワコン”といわれるテレビは，なぜ終わらない？　日経トレンディネット http://trendy.nikkeibp.co.jp/atcl/column/16/041200109/112100015/?ST=trnmobile_f（2017年11月29日閲覧）
佐藤浩一（1998）「自伝的記憶」研究に求められる視点　群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編，47，599-618.
佐藤浩一（2007）自伝的記憶の機能と想起特性　群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編，56，333-357.
佐藤浩一（2008）自伝的記憶研究の方法と収束的妥当性　佐藤浩一・越智啓太・下島裕美（編）『自伝的記憶の心理学』北大路書房　2-18
渋谷明子（2013）「好き」を選択的に共有するモバイル世代―中学生へのインタビュー調査萩原滋（編）『テレビという記憶　テレビ視聴の社会史』　新曜社　177-196.
志岐裕子（2013）インターネット世代のテレビ・コミュニティ―大学生のテレビ視聴　萩原滋（編）『テレビという記憶　テレビ視聴の社会史』　新曜社　158-176.
志岐裕子・李光鎬・小城英子・上瀬由美子・萩原滋・渋谷明子（2012）多メディア環境下におけるテレビの役割―ウェブ・モニター調査（2011年2月）の報告（1）―　メディア・コミュニケーション（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要），62，33-56.
志岐裕子・村山陽・藤田結子（2009）若者のテレビ視聴とメディア並行利用行動―大学生のオーディエンス・エスノグラフィ調査から―　メディア・コミュニケーション（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要），59，131-140.

志岐裕子（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所研究員）